

明海大学不動産学部

不動産の不思議

学生たちの視点と発見

第390回

【学生の目】

通学のため一人暮らしをしているが、駅近くで便利なこともあり、周辺にはたくさんマンションやアパートが立ち並んでいる。住んでいる人は学生や社会人だけでなく、小さな子供を育てる家族も多い。

実際、駅から徒歩5分くらいの範囲に小学校や幼稚園、保育園が数カ所あり、近くの公園ではたくさんの子供が遊具で遊んでいる姿を見受ける。駅に近く、車が頻繁に通る道路沿いの公園で子供を遊ばせることに不安もある。親が近くで見ていると

安全な道路の使い方

しても事故を防ぎきれないこともあるからだ。また、公園までの道路も不安の種だ。

そんな地域に、車道がぐにやぐにやと蛇行する不思議な道路が設けられている（写真）。車やバイクはスピードを出すことができず、仮に子供が道路に飛び出しても、事故を防げる確率がグンと上がる。現地ではばらぐ調査をしたが、通行する車は人が走るのと同じぐらいのスピー

歩・車・自共存探る改善を

ドしか出せない。

一方で課題もある。1つは、人の利便性である。場所によっては歩道が一人分の幅しかなく、歩行者のすれ違いができない。もう1つは、自転車の利便性である。自転車は車道を通ることが原則だが、日本では歩道を通ることも多い。特に、子供を乗せた自転車や子供連れの自転車は歩道を通る。その自転車を通れるだ

けの歩道の幅員がない。日本の道路全体の課題だが、写真の道路では自転車の問題が特に大きい。

調べると、このような道路の造り方をボンエルフという。歩行者と車が共存できるように工夫した道路で、1972年にオランダで始まった。車の速度を遅くする工夫に加えて、車



ポールがボンエルフ本来の利用方法を妨げる

がないときは歩行者が気軽に車道も歩けるよう、歩道と車道の段差がないことも特徴だ。

この視点で写真の道路をみると、車の速度を下げて事故防止をする工夫も段差をなくす工夫がある一方、車道を歩行者や自転車が気軽に使えるようにはなっていない。むしろ、ポールが「人は車道に入るな」と言っている。ポールは車が人にぶつからない配慮だが、それがかえってボンエルフ道路の本来の利用方法を妨げ

ている。

子供を安心して育てられる住環境をつくるには、住まいだけでなく街の細かな工夫が求められる。ボンエルフ道路はとても効果的だが、ママチャリが文化の日本の独自性を加味し、歩・車共存から歩・自・車共存に改善を加え、たくさんさんの街に取り入れてもらいたいと思う。

【教員のコメント】

若者の電動キックボード、高齢者の電動カートなど交通手段の多様化が増す。住み続けられる街づくりのためには道路の造り方や使い方の工夫が必須で、分離と共存を道路の階層ごとに見直すことが求められる。



森安 穂佳

不動産学部3年